

教育センターだより

平成28年度 第4号

黒部市教育センター

今なぜ「働き方改革」なのか

黒部市立桜井中学校

校長 尾村 国昭

大学を卒業後、企業に就職して4年目になる長女が、正月休みで大阪から帰省してきた。今年度から、予め届けを出しておかなければ、夜8時以降は職場に残ることができなくなったのだという。また、年度当初、株式会社ワーク・ライフバランスの社長、小室淑恵氏の講演があり、「ワーク・ライフ・バランス」について熱く語っていったとのこと。氏は、政府や企業に対して働き方改革の提言、コンサルティングを行っている今話題の人である。

「ワーク・ライフ・バランス」とは、「仕事と仕事以外の生活との調和」という意味だが、これについて小室氏は次のように話している。「ライフでインプットをするからこそ、発想力が広がって、人脈が広がって、健康的でいられる。ライフが充実するからこそ、仕事でアウトプットの質も上がる。効率的に働き早く帰ることで、またライフが潤う。スタートは必ず、ライフの充実から。二者は、ぐるぐると好循環する関係なんです。」

現在、多くの企業が、自社の「生き残り戦略」の一つとして働き方改革を推し進めている。一昨年暮れに月100時間を超える残業による過労から、電通の女子社員が自殺した事件は大きな話題となった。これまでも我が国では長時間労働が繰り返し問題視されてきており、政府は「働き方改革」として、企業の残業時間を月平均60時間に制限する上限規制の原案をまとめ、年内にも労働基準法の改正案を国会に提出するようだ。

では、私たち教員の働き方の実態はどうだろうか。ある団体が今年度行った富山県の教員の労働時間に関する調査によると、「過労死ライン」と呼ばれる「残業時間が月80時間を超える」教員が、小学校が19%で約2割、中学校に至っては53%で半数を超えるという結果が出ている。

授業、部活動、会議や書類作成、行事の企画運営、生徒指導や保護者対応等、教員の仕事は多岐に渡る。それらの一つ一つに誠実に向き合い、丁寧に取り組む先生方の姿を見ていると頭が下がる思いである。私たち教員は、どんなに忙しくても「子供のためにもっと何かできないか。」と考えてしまうところがある。そのため、仕事以外の生活の時間が限りなく少なくなっていく。果たして、このままでよいのだろうか。「ワーク・ライフ・バランス」の考え方からすると、今の状態ではより質の高い教育は望めないのではないのか。

読書をしたり、地域の活動に参加し異業種、異世代の人たちと触れ合ったりしてみる。世界で何が起きているのか、新聞や雑誌を通じて知る。日々、心の中になにがしかの問いをもつ。少し足を伸ばして違う景色を眺め、違う風に吹かれてみる。そんな仕事を離れた時間が、子供たちを前にしたときに生きないはずがない。過重労働だから仕事の時間を減らそうという消極的な考え方ではなく、むしろ仕事以外の生活の時間をより充実させることによって、結果的に仕事の質（教育の質）を高めていこうという積極的な考え方である。

これまでも、各学校では多忙化解消に向けいろいろな取組を行ってきた。しかし、「働き方改革」が盛んに言われている今こそ、教育現場にも「ワーク・ライフ・バランス」の考え方を取り入れ、「本当に必要な仕事は何なのか」また、「やらなくてもよい仕事はないか」などを十分検討し、これまでの働き方を見直す時ではないだろうか。そして、これからは「子供のために敢えて生活の時間を充実させる」という視点が必要ではないだろうか。



《内地留学報告》

「情緒障害、発達障害のある児童・生徒への学校や家庭での適応支援

～応用行動分析を利用した対応について～

黒部市立生地小学校 教諭 能 澤 陽 子

現勤務校で1年生を担当し、広汎性発達障害の診断を受けた子供や、精神運動発達遅滞という診断を受けた子供と出会いました。2人の生活の質の向上を目指そうと思いつつも、障害に対する十分な知識や経験もなく、その時々に見せる姿に対して、周りの先生方や通級教室の先生の助言をいただきながら、戸惑いながらの対応で2年間を過ごしてきました。



そんな折、上越教育大学大学院学校教育研究科臨床心理学コースの加藤哲文先生のご指導のもと、発達障害学や応用行動分析について研修する機会をいただきました。ここでは、特別な教育的支援を必要とする子供の指導について、現場での実践につなげるという明確な視点をもって取り組むことができました。

まず、理論として、発達障害学特論の講義では、発達障害の概念や米国主導による診断学の歴史、DSM-5の特徴や医者による診断基準と医師以外の専門職の関わり方、神経発達障害の範囲とその症状、特に自閉症スペクトラム（ASD、アスペルガー）の理解と支援について学びました。米国精神医学会によるマニュアルの訳本を購入し、その特徴や言葉の解釈について実際の子供の姿を通して解説を聞き、理解を深めました。発達障害を抱える子供のQOL（生活の質）が高まるよう、SCやSSWとの連携をよく図り、子供の対応にあたっていく必要性を強く感じました。

また、情緒障害や発達障害を抱える児童・生徒の理解について、特に学校教育現場で「心理教育アセスメント」として用いられているWISC-IVやK-ABC-IIの特徴やアセスメントの目的、方法についての理論を学んだり、実際の場面で用いられる下位検査を試みたり、結果を分析したりしました。結果がどのように処理され、こういった手順で解釈がなされ、児童理解につながるのかについて理解を深めました。このアセスメント法は、児童を理解するための一助であって全てではないことを心に留め、現場では多様な尺度をもってよりよく生きようと願う子供の対応にあたっていきたいと思いました。

特に、今回の研修で意義深かったことは、自分のクラスに在籍しているADHDやLDを抱えるI児への対応について、応用行動分析を利用した対応について学ぶ場をいただいたことです。繰り返し協議を重ねてもらった中で機能的アセスメントの手順や方法、解釈の仕方や行動支援計画の立て方について理解を深めました。担任の「I児はこういう子だ」という側面的で固定的な見方が、行動観察シートの記録に表れており、目の前で観察していながら、しっかり行動を見ていないことを反省させられました。具体的な行動とその直後の状況の変化との関係から、行動の原因を明らかにし、支援の具体を考えるという分析過程の大切さを感じました。現在、支援計画をもとに早速I児の対応に当たっているところです。

今回の内地留学では、特別支援教育についてさまざまな視点から研修を深めることができました。この研修で得た知識と経験を財産として、これからの実践に生かしたり先生方に広めたりしていけるよう、努めていきたいと思えます。

「特別な支援が必要な生徒の理解と学級での支援について」

黒部市立桜井中学校 教諭 宮 本 典 子

10月～12月までの3か月間、富山県総合教育センター教育相談部において研修をする機会をいただきました。研修期間中は、研修主題である「特別な支援が必要な生徒の理解と学級での支援」に関する先行研究や文献による研究の他に、教育相談部の研究主事の先生方による講義を受けさせていただきました。また、グループカウンセリングや自立支援事業、地区相談会といった相談業務にも関わらせてもらいました。

私は、現在、通常の学級の担任をしており、学級内には特性に応じた支援が必要な生徒がいます。私は、前任校で特別支援学級の担任経験があり、生徒理解や支援の在り方について多少の心得があるつもりでしたが、生徒の特性が異なると、過去の経験がうまく生かせず、支援の方法や環境の整備が十分でなかったと感じました。そのため、発達障害等の特別な支援が必要な生徒の特性について正しく理解し、特性に応じた適切な支援を行えるようになりたいと思い、上記のような研修主題を設定しました。

今回の研修によって、特別な支援が必要な生徒の特性について、これまで曖昧な理解にとどまっていた用語を正確に捉えたり、具体的な特性を把握したりすることができました。また、指導事例集やさまざまな文献から多くの事例を知り、自分が実際に接する生徒の特性に当てはめて、適切な支援を考えることができました。さらに、特性のある生徒への個別の支援だけでなく、学級集団の育成も合わせて行っていくことの大切さを知り、具体的な手法として対人関係ゲームやソーシャルスキル・トレーニング、アサーション・トレーニングについて詳しく学ぶことができました。

研修で学んだことをもとに実践計画を立て、3学期にいくつかのゲームやトレーニングを実施しました。この成果を次年度以降にも生かしていけるよう、学級集団づくりの大切さについて周知し、プログラムを学年または学校全体で実施するなど、取組の輪を広げていくことに努めていきたいと思います。

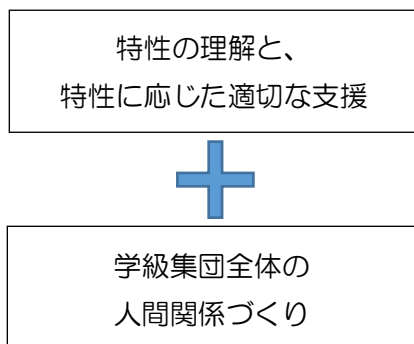
○特別な支援が必要な生徒の理解と学級での支援（要旨）

特性を理解し、特性に応じた適切な支援を行う

特別な支援が必要な生徒の特性について理解し、その特性に応じた適切な支援を行うことが大切である。通常の学級には発達障害等の特性をもった生徒がおり、その特性を理解することで適切な支援に結び付けることができる。また、発達障害に限らず、困難を抱えている生徒一人一人の特性を踏まえて支援の方法を考えていくことが必要である。

個への支援と同時に、学級集団全体の人間関係づくりを行う

コミュニケーションに困難を抱えている生徒がトレーニング等の支援によって対人関係スキルを学んだとしても、そのスキルを生かせる周りの環境が整っていなければコミュニケーションがうまくいかない。そのため、特別な支援が必要な生徒の理解と個別の支援と合わせて、個性のある生徒を仲間として受け入れられる学級集団全体の人間関係づくりが大切である。



黄金の日日—新採の頃（境小学校の思い出）—

黒部市立宇奈月小学校

校長 岩 井 芳 生

いよいよ3月をもって38年間の教職を退くことになります。多くの感動や勇気を与えてくれた子供たち、お世話になった先生方、保護者、地域の皆様に、改めて心から感謝申し上げます。

初めて教職に就いたのは昭和54年4月、今は、さみさと小学校に統合された朝日町立境小学校でした。その名の通り県境にある木造の古い趣のある学校でした。大学を出たばかりで車を持っていなかったのも、国鉄（現在：あいの風とやま鉄道）で黒部駅から越中宮崎駅まで行き、駅の向かいの「近海」というドライブインに自転車を置かせてもらって、そこから毎日学校へ通っていました。村の西の端くらいから子供たちがどんどん集まってきて、そこで自転車を降りていっしょに歩いて登校したものです。私が担任したのは明るく元気な3年生9名の子供たちです。近くの山や浜で子供たちとよく遊んだことを思い出します。山菜を採ったり、海で泳いだりと、私自身、毎日学校に遊びに行っているのか勉強を教えに行っているのか分かりませんでした。県東部小教研の算数の研究推進校だったので、研究発表会もありました。研究授業をさせていただくことになり、とても勉強になりました。家庭訪問はなんと村祭りの日でした。行く先々でお酒やごちそうが出て子供の話どころではありませんでした。子供も親も地域の人たちも学校と一体となっていたように思います。まだ独身だったので、よく学校に泊まっては次の日の教材の準備をしたり、ピアノの練習をしたりしていました。いったいどんな授業を毎日していたのか、はずかしいことによく覚えていないのです。しかし、子供たちのことや当時の学校、村の様子まで今でも鮮明に覚えています。学校全体が一つのファミリーのようであり、先生方は一人一人を自分の子供のようにとても大切にしていました。70名あまりの小さな学校なので、いろいろな面でゆとりがあり、放課後はいつも子供と遊んでいました。授業の下手な分、個別指導に力を入れていました。私のような大学を出たばかりの若い教師でも、子供も保護者も地域の人たちも信頼し、期待を寄せてくれていました。その期待に応えていくために、子供たち一人一人に精一杯の愛情を注ぎ、生意気にも、真剣に、子供たちにとって楽しく喜びにあふれた学校を創りたいという思いでいっぱいでした。境小学校は、関所跡に建っていたので、裏庭に別名「首洗い池」という池があり、「学校に泊まると幽霊が出るよ」とおどされましたが、残念ながら何度も宿直室に泊まっているのに一度も見ることはありませんでした。新採の頃の心に残るエピソードは尽きません。

境小学校は、2年で異動となりました。映画のラストシーンのような、9名の子供たちとの涙、涙の別れの場面を今でも思い出します。境小学校が私の「教師」としての原点であり、まさに黄金の日日でした。



9名の教え子と新米教師の私

（38年前の境小学校前で）

「心の支えになった三人の先生」

黒部市立中央小学校

校長 杉 本 勉

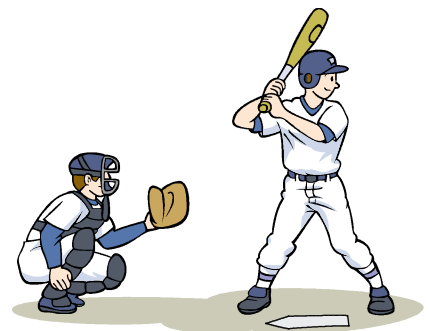
私が36年間、教員としてなんとか勤めることができたのも、三人の先生のお陰だと思っています。三人の先生からの教えや後ろ姿からたくさんのことを学んだことが心の支えとなりました。もちろん、他の同僚の先生方、保護者や地域の方々、そして、たくさんの子供たちと巡り会え、共に成長してきたことに感謝したいと思います。

私の初任校は、舟見中学校でした。全校生徒126名、学級数が5学級で、3年生の副担任でした。3年生担任のS先生は、当時40歳ぐらいでしたが、教務主任やPTAも兼務され、学校運営の中心として、いつも夜遅くまで仕事をしておられました。39人の学級担任として、3年間持ち上がりということもあり、生徒一人一人のことを熟知しておられ、時には生徒を泣くぐらいまで追い込んで指導したり、笑顔で優しく褒めたりもしておられました。私もこのような先生になればいいなあと思いました。舟見中学校には1年間でしたが、教員としてのいろはを学ぶことができました。

私は、2年目で朝日中学校に異動しました。そこで出会ったN先生は、柔道部の顧問をしておられ、柔道部は全国大会にもよく出場していました。そのN先生に「一度、柔道部の練習を見に来い」と言われ、練習を見に行きました。生徒たちは全員、N先生の話真剣に聞き、全力で練習に取り組んでいました。私はこのような雰囲気の中で練習をしているから生徒たちは強くなって、試合で活躍できるのだなあと思いました。私は最初、男子バレーボール部の顧問をしましたが、最初の一年ぐらいは思うように指導ができませんでした。毎日、練習に参加すると全員が揃うようになり、なんとか普通の活動ができるようになりました。時々、練習試合をしたり、合宿したりすると、生徒たちも一生懸命、練習するようになりました。なんとか軌道に乗ったとき、野球部の顧問を任されました。野球部の生徒は、野球好きな生徒が多く、運動能力も高く、厳しい練習にも付いてきてくれました。2年目に県大会に出場し、4年目に県大会で優勝することができました。その後、桜井中学校、鷹施中学校でも野球部の顧問をし、北信越大会にも数回出場することができました。これも、たくさんの素晴らしい選手に恵まれ、保護者の協力があったからだと思います。中には、甲子園に出場した優秀な選手もいました。何よりも、教員になって野球の指導をしたり、スポーツ少年団の指導者をしてしたりして、次の世代の子供たちを育てている姿を見ると大変うれしく思います。

鷹施中学校に勤めていたときに、K校長先生に出会いました。K校長先生は、いろいろなことに経験豊富で、人を育てるのが大変うまい校長先生でした。毎日の打合せなどで、日々の教育実践に沿って管理職としての基礎・基本を教えていただきました。学校教育目標を常に念頭に置き、それに向かって教育活動を進めていく大切さを学びました。

以上、三人の先生から共通して学んだことは、優れた手本をもとに子供たちに情熱をもって接してやれば、子供たちは育っていくということです。私にとっては、国立立山青少年自然の家勤務や最後の二年間、小学校に勤務させていただいたことも非常によい経験となりました。私はこれで学校現場を去りますが、各先生方には、これからの子供たちのために自分の信念を大切にして頑張ってもらいたいと思います。





「しかし、俺は人一倍教員らしくありたいんだ」

黒部市立高志野中学校
校長 平 崎 和 則

「組長、〇〇のことだけど、これでいいかな」「組長、・・・・・・」。同僚は一樣に私のことを「組長」と呼ぶ（総教セ時代は「親分」であった）。

こんなエピソードもあった。

- ・不審者を捕まえた時であった。彼曰く「借金はちゃんと返しますから・・・・。」
(俺は借金取りじゃない！)
- ・4月当初、朝の交通立番をしていた時であった。時の女性校長曰く「そいおっかない顔、朝から子供が見たら気分悪くなるから、明日から立たなくて結構です。」(・・・・・・)

風貌、言動からしてそれも仕方ないことか。

“教員らしく見えないのなら、それはそれで結構。

しかし、俺は人一倍教員らしくありたいんだ”

昭和54年4月、朝日町立泊中学校を皮切りに始まった我が教員人生。38年の時を経て今年3月、黒部市立高志野中学校でその任務を終えようとしている。

思い起こせば、校内暴力やいじめ、不登校の急増、学校週5日制や総合的な学習の時間、ゆとり教育、教員免許状更新制度等の導入、教育基本法をはじめ関連法案の改正等、この間の教育界はまさしく激動であった。

終焉を迎える今、振り返るに、どんなに教育界が揺れ動こう（流行）と、以下の点で私はブレることなく（不易）心掛けてきた思いがある。人一倍教員らしくありたいがために。

1 子供一人一人は「何よりもまされる宝」との思いで

これは私の根底を流れる考えである。昨今、児童虐待等が社会問題化しているとはいえ、親にとって我が子は何よりも大切な宝である。こう考えた時、自然と子供たちに対する愛情や慈しみの心、そして教育への熱い情熱と使命感、責任感が沸々とわいてくる。

2 「本質は何か」を常に考えて

「今起こっている問題の本質は何なのか。本質からずれた議論になっていないか」「噂や伝聞に惑わされ、過度な反応をするな。できるだけ事実、本質を見極めよ」など、表面的な言動に惑わされることなく、それに隠されている心、真意をまず考えよ。そうすればやるべき事が見えてくる。私が最も心酔した校長から学んだことの一つである。

3 「授業で勝負」との思いで

子供たちの学校生活の大半は授業である。確かな学力を育む場であり、子供と教師の信頼関係づくりの場である。「授業」こそが学校教育の基盤。「授業で勝負しないで何で勝負する」との思いでやってきた。また、子供にとってはベテランも新米教師もない。新採の時から「先輩に負けない授業をするんだ」「先生の授業はつまらん、分からんと言わせない」との思いで授業づくりに励んだ。半年以上かけた教材もあった。著名な先生に一方的に電話し、相談したり、直に資料をお借りしたりしたこともあった。とにかく教師が楽しまないと子供に伝わらない。実感である。

4 「自分の都合より、子供の都合」との思いで

日々の多忙な中でつい子供側から見る視点がおろそかになりがちで、適時性を欠いた対応をしてしまいがちである。「何を」「いつ」して欲しいと訴えているのかを難しいことだができるだけ考えるように心掛けてきた。

5 「手を離せ、目を離すな」との思いで

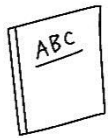
教育は自立への支援ともいえる。できることはやらせて育てる。できることかどうか、どうやらせるかを判断するのが教師の責務である。自己判断や自己決定の場を与える工夫をする。これは生徒との関わりにおける大事な視点と考える。

【補足】※私の禁句；「教え子」

「よく先生方はかつて授業に出ていた生徒のことを『この子は私の教え子の…』とか言ったりしますが、私からするとそれは傲慢ですね。先生方は授業に出ていたら、それだけで教えたつもりになっていませんか？「教え子」か否か、本当に教えてもらった、教わったと感じるのは、生徒の方なんですよ。」

歎異抄第6章を前に講師の先生が語った言葉である。使わなくなつて20年は経つ。

高志野中学校で過ごさせてもらうのもあとわずかとなった。今、胸に去来するのは、言葉では言い尽くせぬほどお世話になった黒部市教育委員会をはじめ、何があっても文句も言わずついてきてくれた、そして支えてくれた高志野中学校の先生方、私の意をくんで「和」や「結」のもと、心一つになろうと頑張ってくれた生徒たちへの「感謝」の2文字である。



英会話授業公開月間を終えて

小学校英会話講師 平野 智恵

黒部市で英会話科授業が始まって 11 年目を迎え、さらに今回で公開授業も 3 回目になりました。子供たちは公開授業に緊張する様子もなく、普段通りの笑顔で授業に参加する様子をお見せできたと思います。

英会話科の授業には教科書がないため、基本的には子供たちは英語を読んで覚えるのではなく、耳から聞こえた英語を繰り返し練習して会話を楽しんでいます。ただ、小学校の時点では、実際の場面で使う機会が限られているというのが現状です。そんな中、ある学校の 4 年生が半年前に習った内容を廊下で A L T に突然質問してきました。なぜその質問をしてきたのか聞いてみると「知りたかったから」と答えてくれました。その子供は A L T との英会話を笑顔で楽しんでいました。

またある学校では、6 年生の公開授業で A L T と私がアクティビティの説明をいつものように英語でした際に、子供たちは理解して大きな声で“OK.”と反応しました。すると保護者の方から感嘆の声が上がりました。これは普段の授業で、子供たちがよく聞いて理解しようとするような環境を作っている担任の先生のおかげでもあります。小学校の英会話科では、このように聞いて理解する力をつけて中学校に送り出したいと思っています。

さらに、普段接している A L T とだけでなく、他の学校の A L T や、学校に訪問された外国人ゲストなどにも話しかけるチャンスが増えれば自信にもつながっていくのではないかと感じています。中学校、高校、その先に繋げて英語が話せることに喜びを感じ、それが当り前の事になってくれれば嬉しいです。



センターからのお知らせ

今年度・来年度のセンター主催の研修会講師の方の書籍を購入しました。棚を通じて貸し出しますので、お気軽にメールかお電話でお問い合わせ下さい。

【平成 28 年度】

○学力向上講演会 田中博之先生

・学力向上プロジェクト「こんなクラスにしたい！」を子どもが実践する方法 中学校編

○生徒指導講演会 大河原美以先生 ・子どもの「いや」に困ったときに読む本

【平成 29 年度（予定）】

○学級運営研修会 赤坂真二先生 ・やる気を引き出す全員参加の授業づくり

○道徳講演会 杉田 洋先生 ・自分を鍛え、集団を創る!特別活動の教育技術

○外国語活動講演会 金森 強先生 ・小学校外国語活動成功させる 55 の秘訣

うまくいかないのには理由がある





3学期の研修会より

【英会話科カリキュラム部会研修会】(12月26日)

市内各小中学校1名ずつのカリキュラム部員と、英会話講師6名が集まって、来年度の英会話科年間指導計画案を作成しました。

文字の指導やリアクションワード等についての成果や課題を持ち寄り、授業の内容や終末での振り返りの方法等について活発に話し合いました。子供たちが楽しみながら学習できるように、低学年の単語を精選したり、リアクションワードを見直して学年を入れ替えたりしました。

来年度も、子供たちが目を輝かせるような授業にしようと、熱心な話し合いが続いていました。



【いじめ問題等研修会】(2月2日)

【生徒指導主事等研修会】(2月8日)

教頭先生を対象とした研修会と生徒指導主事等を対象とした研修会を行いました。いずれも東部教育事務所の 籠浦智彦 主任生活指導主事を講師にお招きして講演をしていただきました。

「いじめ問題等研修会」では、いじめ防止対策推進法によるいじめ認知や管理職としての対応についてお話しいただきました。「生徒指導主事等研修会」ではネットトラブルへの対応について、トラブルの現状や大人(保護者)の対応についてお話しいただきました。

学校現場の喫緊の課題について、先生方も認識を新たにしていたようです。

【体力・運動能力向上研修会】(2月27日)

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果を基に、黒部市の子供たちの体力を向上させる効果的な手立てについて研修を行いました。3月1日には、体育主任が出席する県の研修会が行われることになり、その前に黒部市や各校の現状を把握してもらおうと、この日に開催しました。

演習では、グループごとにブレインライティングの手法で効果的な手立てについて話し合い、結果をポスターセッションの要領で発表するなど、主体的、協働的な研修を行いました。

参加者からは、「3月の研修会に向けて、よい機会になった」「具体的な対策について様々な意見が出てきてよかった」等の感想が寄せられました。

